注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
幻想となった二人の少年

【作者名】
ｄａｂｕｒｕ

【あらすじ】
ある町に暮らしている二人の少年。
如月匠（きさらぎたくみ）　鈴木一平（すずきいっぺい）
この二人が幻想卿で大暴れ？そして楽しく愉快な仲間たちと過ごす日々を描いた話です。

シリアスとか全然書けないので、面白いのを、書いていけたらいいなぁと、おもいますので気軽に見ていてください。

プロローグてきな？

「ここどこだよー！」
　始まっていきなり大声を出す人物彼が
　どうしてこうなっているかというと
　数時間前にさかのぼる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「はぁ学校めんどくせぇ。まず大体どうして学校行くわけ？別にいかなくていいじゃｎ（ｒｙ）「いいわけないだろ！」」
「大体どうして何時も愚痴しか言わないんだよ！たまにはやる気を見せろよ！聞いてるのか？匠!!」
　とか言ってる人物。名前は、鈴木一平と言う。
「だってまだ小学生のころの方がましだったし、なのに中学生なった瞬間、勉強やれとか部活行ってこいとかあーだこーだうるさいんだよ！そんな中やる気を見せろだと…ふざけているのかお前は！」
「ふざけてねーよ!!」
「てかあれ何？」
「чыосчь̏ʼóoµ̡ζµoχżţdzdzţ̔ġïj̔ġk何？」
「何語だよ…ほらあの黒い穴。」
「何だろうあれ？」
「俺に聞かれても分からないよ。」
「まぁ覗いて見ようか？」
　匠がそういったあと二人は、穴に近づいていった。
「うわー目玉だらけだ。」
「うん気色悪い」
「というわけで逝くぞ一平」
「逝くって何処に「この中とぉ」だぁぁぁぁぁ。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

そしてこの状態に至っている。

「どうすんだよ！さっきの穴がもうないぞ!!帰れない。」

「うーん何処かで聞いたことあるようなこの感じは。えっと確かあ！まさかー幻想入りなんてありえるわけがｎ（ｒｙ）「ありえますわよ。」

えっだれ？」

「あっさっきの穴だ」

「あっスキマ妖怪八雲紫だ。」

「あら知ってるのね、なら話は、早いわ。」

「貴方達には、ここ、いや、幻想卿にいてもらうわ。」

そして沈黙が五秒ぐらい続き

「は？」

「いやどういうこと？」

「そうねぇそこの銀髪の方特に貴方は、外の世界には、いさせられないの。」

「どうしてだよ。」

「それは、貴方には、能力があるの。しかも三つも、その中でも危険な能力があるのよ」

「どんなの？」

そう聞くのは、一平であった一方匠は、ずっと下を向いている。

そして紫が口を開いた

「それは…「有無を操る程度の能力、相手の百手先を読む程度の能力、そして破滅を導く程度の能力だろ。」へっ？」

そう言ったのは、匠であった。

「知ってたよ俺の能力位そのせいで、親から捨てられたんだから…」

「匠…」

「そう…知ってたの…だからこそここに残ってもらうそして貴方の破

滅を導く程度の能力を封印させてもらうわ。」
「分かったじゃあ行こう。」
そういった匠は、二人と共にスキマの中に入っていった。